

中島賢太郎／手島健介／山崎潤一 著

『歩いて学ぶ都市経済学』

日本評論社 2025.10 248 ページ

伊藤 亮

(東北大学大学院情報科学研究科)

E-mail: itoh@se.is.tohoku.ac.jp

最新の都市経済学が変える街歩きの視点 ——データと理論の外側を散歩する

都市は面白い。本書を読み終えて、改めてそう思った。街を歩くような気軽な語り口で、いつの間にか都市経済学の専門的な内容や、最新の研究成果を学んでいる。本書の魅力を簡単に言えばこういうことだろう。ただ、私を含む都市経済学者にとって本書は、都市を突き詰めて研究することと、街を歩いているいると感じることが、実は切り離せないものなのだと再確認させてくれる一冊でもある。

街を歩けば、不自然に隣り合う同種の店舗や不思議な道路の形など、興味深い光景に数多く遭遇する。街歩きを面白いと思う人は少なからずいるだろうし、私がもう四半世紀も前に都市経済学を学ぼうと思いついた理由もそんなところだ。しかし、そうした街歩きの面白さは、なかなか自分の研究とは直結してくれない。その一つの理由は、都市経済学が本質的にとても難しい分野だからだ。

都市経済学が難しい理由はいくつかある。第一に、空間の広がりの中に無数の地点が存在し、その場所ごとに異なる経済活動が行われること。第二に、生産や消費といった経済活動と、それらを支えるインフラ整備などの政策が、互いに切り離せない状態で絡み合っていることだ。要するに、きわめて高次元で変数の数が多いのである。さらに、本書の第1章と第2章でも扱われる「集積の経済」が、問題をいっそう複雑にする。集積の経済とは、人や企業が集まることで生産性が上がるといったメリットが生じる正の外部性を指し、これが都市の成長を促すエンジンとなる。ところが、この集積について考え出すと、どこが始まりでどこが終わりなのか判然としなくなる。人が集まるからさらに人が集まる、というトートロジー（同義反復）を前に、我々はしばしば本当の目的が何かを見失い、複雑なモデルの拡張という内向きの精緻化に囚われてしまう。こうして、都市経済学を志すきっかけとなった街歩きの楽しさは、学問としての都市経済学のもとを離れていってしまう。

都市経済学の難しさをまた別の言葉で表現するなら、それは内生性の問題に直面するということだ。集積の経済（人が集まると生産性が上がる）にせよ、コンパクトシティの評価（効率的な形状

の都市は人を惹きつける)にせよ、因果関係の原因はすべて、人間が何らかの合理的な判断に基づいて決めたもの、すなわち内生変数である。内生変数に基づく統計的な分析は、データの裏側に潜む真の原因である「除外変数」の存在によって推定結果に偏り(バイアス)が生じる。そのため、近年の社会科学ではそれ単体では不十分な証拠とみなされやすい。かといって、自然条件や地政学的なショックといった純粋に外生的な要因だけに帰着させて都市の差異を説明するのも、どこか物足りなさが残る。そうした初期条件を与えられた都市が、どのような経緯をたどって現在の姿に到達したのか、そのプロセスをブラックボックスにせず、細部まで明らかにすることこそが、我々が都市研究において本当にやりたいことなのだ。

ここでようやく本の紹介に戻ると、本書の面白さは、まさにこの内生性の問題に徹底的に立ち向かう姿勢にある。全12章にわたり、それぞれ多彩で独立したテーマを扱う本書の各章は、前半こそ平易な語り口で都市の魅力を語り、その理論的背景を丁寧に解説してくれる。しかし、都市経済学の最先端の論文の紹介を通じて都市のメカニズムの核心に迫ろうとする中盤以降では、それらの研究がこだわっている内生性や除外変数の問題を、一切の妥協なく読者に伝えようとする。これは単に入門書として勉強になるとか、格調が高くて信頼できるというだけではない。最前線の研究者たちが、考えられるバイアスの可能性を徹底的に議論して洗い出し、衛星画像やスマートフォンの位置情報、あるいは博物館に眠る歴史資料を用いた自然実験(準実験)などを駆使して因果関係の解明に挑むプロセスは、彼らの知的な営みが織りなす物語のようで、読んでいて胸が躍った。

専門的な知識を補強するための巻末付録は、大学院生が読んでも十分に手応えがあるほど充実しているし、そこを読み飛ばして本文だけを丁寧に追っても、厳密な因果推論の面白さは十分に伝わるはずだ。因果推論という枠組みを横に置いたとしても、純粋に都市に関する読み物として一級品であり、幅広い読者に安心して手に取ってほしい一冊である。

しかし、内生性をこれほどまでに徹底的に解決して最終的に得られたものが、人が集まると生産性が上がるとか、都市がコンパクトだと住みやすい、のような一見して自明な結論であることに、読者はいささか肩透かしを食らったように感じるかもしれない。因果推論の厳密さは学術研究には必要不可欠だとしても、それが街歩きとの間の溝をどのように埋めてくれるのか?理由は二つある。

第一に、本書の内生性を徹底して排除する姿勢が、街歩きの質を高めてくれるからだ。先に述べたように、内生性とは、本質的にデータとして利用できない除外変数の問題である。その可能性に気づいて適切に対処するには、「データの外側」に存在する都市のメカニズムへの深い理解と想像力が要求される。例えば、第1章と第2章で指摘されているように、単に人や企業が一箇所に集まっているという事実だけでは、必ずしも集積の経済を示す証拠とはならない。それは単に自然条件やインフラに恵まれた場所にそれらが集まっただけの、見かけ上の相関かもしれないからだ。このような問題を解決するためには、人や企業がどのように立地を決定するかという根本に立ち返る必要がある。本書を読み終えた読者は、例えば街でカレー屋が3軒並んでいるのを見かけたとき、その現象の背後にある除外変数を探そうとしている自分に気づくだろう。このように本書の議論を追うことを通じて、読者は街歩きでのささいな発見について、自分の頭で主体的に考える習慣と視点を獲得する。

第二に、因果関係を厳密に特定しようとする本書の作法が、街を歩いたときに感じるふんわりした興味から、よりリジッド(厳密)で本質的な問いを引き出すことを要求するからだ。そもそも内生性のバイアスというものは、問いが因果関係の形で特定化されていなければ問題にすらならない。厳密な分析を行うには、まず問題の明確化が必要なのだ。もちろん、リサーチクエスションは

何でも良いわけではなく、最初に感じた疑問や興味にとことん忠実であるべきだ。しかし、都市経済学においては、問題の本質をとらえる因果関係の抽出作業はとりわけ難しい。すでに述べたように、集積の経済は原因と結果が循環しており、第10章で扱う都市の境界の問題も、境界が引かれた理由と引かれた後の影響が分かちがたく混在している。

しかし本書は、街歩きの疑問をいかにも自然にリサーチクエスションにつなげてくれる。著者たちは街の中で出会う小さな違和感や不思議を見逃さず、それらの因果関係の一つずつ丁寧に解明しようとする。始まりとなる問いはごくささいなものでも、それを解くことで現れる新たな問いに、再び丁寧に向き合うということを繰り返す中で、循環していたかに見えた大きな疑問の輪がしだいに解きほぐされてゆく。特に第10章前半で、町田市の境界が引かれた理由を地理・経済・政治の要因に順次帰着させる展開は見事だ。一つの視点で説明しようとしたときに残る違和感は、そのまま次の視点へと引き継がれる。統計分析そのものではなくとも、問いを発見するプロセスの面白さを提示してくれるこの部分は、私が本書で最も気に入っている箇所の一つである。

データの背後にあるメカニズムを想像力を駆使しながら解き明かし、そこから生じた新たな疑問を次なる問いにつなげていく。本書が示すこうした手続きを丁寧に反復しながら都市を観察する視点を進化させていった先に現れる、最も手ごわい問題の一つが、都市が抱える時間という蓄積だ。都市の歴史を扱う第8章と第9章は、この都市のブラックボックスに果敢に挑んでいる。

本書を通読すれば、この本の根底には都市の歴史に対する一貫した興味が存在することに気づくだろう。近年、多くの経済学者が歴史を扱う動機について、著者らは第5章のコラムの中で、経済理論の検証や政策的含意を引き出すためのスタンスであると述べている。しかし、本書の随所に散りばめられたエピソードからは、著者たちが都市の歴史そのものに強い関心を寄せていることが伝わってくる。とりわけ上述した二つの章は、手法上の必要性を超えて、歴史、あるいは時間という軸に正面から向き合い、都市の形成プロセスを解明しようとしている。現在のデータから都市における因果関係を特定化しようとするとき、その歴史は原因と結果の双方の底を流れる除外変数として、何度も我々の前に立ちはだかつてきた。その中身を明らかにすることは、因果関係を解きほぐしてバイアスを緩和するための道筋を示してくれるはずだ。

現在の都市の姿は一日にして成らず、過去の積み重ねが色濃く影響している。再開発を行うには、建設コストだけでなく、既存の建物や複雑な権利関係を整理するための膨大な調整コストが必要になるからだ。そのため、数百年前の土地利用の影響が、今なお目に見える形で残ることも珍しくない。第9章では、丸の内のビル区画と江戸時代の大名屋敷の区画が驚くほど一致するという著者たちの共同研究を通じ、この調整コストが歴史を継続させる証拠を鮮やかに示している。

しかし、もし歴史が続く理由がこうした物理的な調整コストだけならば、大規模災害や戦争ですべてが破壊された都市は、過去をリセットして新たな道を歩むはずではないか。この問いを扱うのが第8章である。興味深いことに、都市経済学ではこれまで、壊滅的な被害を受けた街が、なぜか元の姿に近い形で復興するという事実がしばしば報告されてきた。第8章で紹介される最新の研究は、これを「合理的期待（人々の予想が将来を決めるという考え方）」のモデルで説明しようとし、実際に人々の復興への「期待」が都市の形成に大きな役割を果たしたことを示している。こうした期待が具体的にどう形成されるのかは今のところ明らかではないが、第8章と第9章は、有形無形の歴史的影響が都市の形成に寄与することを力強く示し、そこにはまだ多くの魅力的な問いが眠っていることを教えてくれる。

都市の複雑さをここまで突き詰めて描き出しつつも、一方的に知識を押し付けるのではなく、読者と同じ目線で疑問を共有しながら一緒に丁寧に考えてくれる。この専門性と分かりやすさの両立

があるからこそ、本書は優れたテキストとなっている。充実した最新の実証研究のレビューは、大学院レベルの精緻な議論にも耐えうるだろうし、初学者にとっても、未解決の問いに挑む研究の熱量に触れる絶好の機会となるだろう。最前線の論文がどのような問題にチャレンジしているかをたどることは、本格的に都市経済学を学ぼうとする読者にとっての確かな道標となるはずだ。

こうした次のステップに進もうとする読者に残された最大の懸念は、やはり理論的な部分の理解をどう補強するかという点に尽きるだろう。理論と実証の厳密な接続というのは、都市経済学という分野全体が今なお直面する問題であり、本書だけにその責任を負わせるのは不当かもしれない。しかし、都市のメカニズムに対する理解は、本来厳密な理論によってその正当性が担保されなければならない。因果推論によって何が起きたかを特定できたとしても、それが都市に住む人々の幸福にどう影響したのかといった本質的な意味を見出すには、目に見えるデータや事象を見えないものへとつなぐ、理論という架け橋が不可欠だからだ。ここで言う見えないものとは、一つには厚生や効用であり、もう一つは観察されたものとは異なる潜在的な事象だ。現実には観察されたのがインフラ整備による地域の発展だけだったとしても、それは別の場所ではストロー効果を通じて地域を衰退させたかもしれない、というもう一つの可能性について、決して目をそらさず検討し続けなければならない。そうした理論が果たすべき役割を、既存の理論研究の結果の感性的な引用や、一般性を欠くトイ・モデルによる正当化に頼っている限り、内生性に関する厳密な議論もどこか空虚なものに感じられはしないか（その意味で、省略された理論部分を極力著者自身の丁寧な言葉による説明のみで補おうとする本書の姿勢には、研究者としての良心を感じる）。

昨今の最新研究では、実証分析とシミュレーションを相互補完的に組み合わせる手法も試みられているが、こうした総合的なリサーチデザインには、何をモデル化すると同時に、何をモデル化しないかという意識的な選択が不可欠となる。特定のモデルの計算だけに特化して勉強しても必ず行き詰まる。それは実証研究における除外変数がデータの外側の問題だったのと同様に、理論研究でもまた「モデルの外側」への具体的な想像力が要求されるからだ。最新の手法にとらわれすぎず、ある程度広いクラスの都市経済理論を体系的に学び直しながら真の意味での理論的な直感を養うことは、本書の議論を自分の中で血の通ったものにし、さらにその先に進むために必要な作業だろう。そして街を歩くことは、データや既存の理論のさらに外側にある現実を、自らの目で補完する営みにほかならない。

幸いにも本書を通じて都市経済学と出会うことができた人は、理論を学び、たくさんの論文を読み、同じくらいたくさん街を歩いた後で、再び本書を手にとってみてほしい。きっと新たな発見があるはずだ。その頃には本書の内容や視点も少し古びて見えるかもしれない。しかしそれは、未来のあなたが、そしてその時の都市経済学が、今この時代の都市経済学の最前線に存在している本書の知見を乗り越えていったという、たしかな証拠なのだ。